

横浜合唱協会 第62回定期演奏会



2013年2月3日(日)
横浜みなとみらいホール 大ホール
主催：横浜合唱協会

横浜合唱協会 第62回定期演奏会
～八尋和美先生指揮者就任40周年記念公演～

F.メンデルスゾーン (1809-1847)

キリエ ニ短調

Kyrie in d

讃歌 《わが祈りを聞きたまえ》

Hymne "Hör mein Bitten"

— 休憩 —

J.ブラームス (1833-1897)

ドイツ・レクイエム

Ein deutsches Requiem op.45

指 揮：八尋 和美
ソプラノ：天羽 明恵
バリトン：吉原 輝
管 弦 楽：東京バッサ・カンタータ・アンサンブル
合 唱：横浜合唱協会

ごあいさつ

本日は横浜合唱協会第62回定期演奏会にお越しいただきまして、誠にありがとうございます。本年は当会の常任指揮者八尋和美先生の就任40年目に当たり、今回はその記念演奏会として先生ご自身の選曲による、ブラームス「ドイツ・レクイエム」他2曲を演奏いたします。

八尋先生には40年の間、週1回の練習ではほぼ毎回ご指導をいただき、発声とアンサンブルの両面から私たちアマチュア合唱団を辛抱強く育てて下さいました。横浜合唱協会が今日あるのは、ひとえに先生のご尽力のおかげです。本日は団員一同、先生への感謝の気持ちを込めて歌います。純正調のハーモニーを目指した、柔らかく且つ大胆な八尋サウンドをご堪能いただければ幸いです。

2013年2月3日

横浜合唱協会 代表 堂崎 浩

指揮者からのメッセージ



ブラームスとの出会い

「レクイエムならモーツァルトだろう!」「いや、フォーレがきれいだし、音も取り易いぞ」「ヴェルディーはどうだ?」「あれはオペラだよ。でかい声を持っている団体じゃないと無理だね」「ブラームスは?」「おっ! 渋いね」「だめだめ! 難しくて歯が立たないよ」

この会話、60年以上前に私が在籍していた福岡の合唱団員達、それも合唱曲に詳しいベテランの人たちの会話です。場所は、この合唱団の指揮者、安永武一郎氏（ベルリンフィル元コンマス安永徹氏の父君）宅二階のレッスン室で、夏の夕方、窓を開け放ったざっくばらんな雰囲気の中でした。当時、レクイエムの「レ」も知らなかった新米団員の私にとって、先輩方の言葉がなんとも新鮮で、特にブラームス（私は“子守歌”と“ハンガリー舞曲”しか知らなかった）に、渋くて難しい「レクイエム」なる作品があるのを知ったのは、この時が初めてでした。

空想の中のブラームス・レクイエムとの初対面はこの2年後、芸大に入学した年にやって来ました。この年の芸大秋の定期演奏会に、この曲が組み込まれ、入学早々の4月から週二回の練習が始まったのです。指揮は当時第一線で活躍中の金子登氏、練習ピアニストが一学年上でまだあどけなさの残る小林道夫さんでした。ずっと後の事、小林さんがこの時を回顧して、FM番組の中で次の様な意味の事を語っておられました。「ブラームス・レクイエムはとっつきは悪いのですが、やっているうちに味わいの出てくる曲です」と。

バリトンのソリストは当時4年生の大賀典雄さんでした。声楽家でありながら最後は大会社ソニーの会長に迄登りつめられた方です。エピソードがあります。当時NHK交響楽団指揮者のクルト・ヴェスさんが、芸大にこのブラームスのレッスンに来ました。3楽章の大賀さんのソロ、「siehe!」... ヴェスさんがストップ、もう一度「siehe!」「ナイン（違う）」もう一度「siehe!」... ヴェスさん、やおら大賀さんの腕を引っ張りました。笑っていたから怒っていたのではなく、「君の発音は“引っ張れ/ziehe（ゾィエ）”で“見よ/siehe（ズィエ）”には聞こえない」と言うのです。大賀さん少しも動じず、左手の指で○を作ってOKのサイン。ヴェスさん苦笑。大賀さんの若いうちからの大物の片鱗を見せた一コマでした。私にとっては、ドイツ語の微妙な発音に気付かせてくれた瞬間でもありました。

練習の初期は確かにとっつき悪く、友達同士で「音が取れねーんだよなあ」とかぶつぶつ言いながら、気乗りしない雰囲気だったのを覚えています。それぞれ2楽章、3楽章と進むにつれて、はっきりと全体の様子が変わってきたのです。私自身の体の中にも、おぼろげながらブラームスが、あの福岡の先輩の言葉と共に入ってきたような気がしました。それ以来折にふれて「ブラームス・レクイエム」は、私の体の中で醸され続けているのです。

八尋和美

プロフィール

八尋 和美 (やひろ かずみ / 指揮)

東京芸術大学声楽科卒業。声楽を矢田部勁吉、指揮法を渡辺暁雄の諸氏に師事。芸大卒業と同時に東京混声合唱団の創立に参加。以来、東京混声合唱団のコンサートマスターとして、同団のトレーニング、編曲、指揮者として活躍。1973年、東京混声合唱団指揮者に就任。同団との全国的な演奏活動の他、アマチュア合唱団の指導、合唱指導者の育成にも優れた手腕を発揮している。1982年、文化庁芸術家在外研修員として旧東ドイツを中心に研鑽を積む。1997年、東京混声合唱団正指揮者に就任。現在、くらしき作陽大学客員教授。横浜合唱協会は1973年より指導。

天羽 明恵 (あもう あきえ / ソプラノ)

東京芸術大学卒業。文化庁派遣芸術家在外研修員としてシュトゥットガルト音楽大学に留学。1995年ラインスベルク音楽祭でティーレマン指揮《ナクソス島のアリアドネ》にツェルビネッタで出演、さらにソニア・ノルウェー女王記念第3回国際音楽コンクールに優勝し一躍注目を集める。ドイツを拠点として、ジュネーヴ大劇場、ザクセン州立歌劇場、ベルリン・コーミッシェ・オーパー等欧州各地の歌劇場や音楽祭に出演。国内でも新国立劇場、サントリーホール・ホールオペラなどへ定期的に登場し、主要なオーケストラの定期公演にもソリストとして出演している。サントリーホール・オペラアカデミーのコーチング・ファカルティとして、若手の指導にも力を入れるほか、解説付きオペラの公演をプロデュースし、オペラの啓蒙活動にも積極的に取り組んでいる。1999年度アリオン賞、2003年第14回 新日鉄音楽賞フレッシュアーティスト賞受賞。日本ロッシーニ協会運営委員。

吉原 輝 (よしはら てる / バリトン)

東京藝術大学卒業、同大学院修了。イタリアのミラノ音楽院留学後、ドイツのシュトゥットガルト国立音楽大学大学院リート及びオペラ科修了。『セビリアの理髪師』のタイトルロール、『魔笛』のパパゲーノ等で、ドイツ、スイス、フランスでオペラ出演。これらは欧州のメディアで放送され、CDとして発売もされている。他宗教曲でも、H・リリング等著名な指揮者と共演するなど定評がある。また1995年、第七回奏楽堂日本歌曲コンクールの優勝を機に、故郷中良輔氏による演奏会に国内で多数出演し、渡欧後も欧州各地で日本歌曲の演奏会に精力的に出演。昨年には日本歌曲のCD「海浜独唱」をドイツのEingenArtから発売し、今年中にも二枚目を発売予定。チュービンゲン大学哲学学部にて「日本の美と表現について」という特別講義を定期的に行うなど、ヨーロッパでの日本文化の発展に寄与している。また2007年にN響に招かれ出演した、N・サンティ指揮「ボエーム」の好評を受け、今秋もN響定期に出演予定。シュトゥットガルト国立音楽大学、ルードヴィクスブルク教育大学声楽講師。

東京バッハ・カンタータ・アンサンブル

東京バッハ・カンタータ・アンサンブルは、東京芸術大学の学内サークルとして、小林道夫氏のもとで活発な演奏活動を続けてきた「芸大バッハ・カンタータ・クラブ」のOB、OGを中心に、卒業後もカンタータの演奏を続けようと有志が集まり、1977年に発足しました。メンバーは各自がソリスト、室内楽、オーケストラなど、各方面で活動しているため、多少流動的ですが、活動開始から既に30数年を経ており、バッハやヘンデル等のバロックからハイドン、モーツァルトの古典、最近ではメンデルスゾーン、ブラームス、ドヴォルザーク等のロマン派、更にはフォーレ、プーランク、デュリュフレ、ベルトといった近代、現代のものまでレパートリーを広げています。その演奏はいずれもが様式感に則った生き生きとしたもので、共演した各合唱団、指揮者から、高い評価を得ています。過去においては、ヴェルナー・ヤーコプ、H.ヴィンシャーマン、H.J.ロッチュ、ペーター・ノイマン、クリストフ・ピラー、小林道夫、八尋和美、黒岩英臣、井上道義など内外の指揮者をはじめ、横浜合唱協会、新潟メサイア合唱協会、オラトリオ東京、文京シティ・コア、合唱団「樹林」、盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、仙台宗教音楽合唱団など、全国各地の多くの合唱団と共演しています。横浜合唱協会とは10年以上に亘って共演を続けており、今回は12回目になります。(公式ホームページ <http://www.tokio-bach-kantaten-ensemble.com/>)

第1 ヴァイオリン	川原 千真 (コンサートマスター)	フルート	立川 和男	日野真奈美
	宮崎 桃子 上ノ山美香	ピッコロ	押部 朋子	
	加藤 洋子 長岡 秀子	オーボエ	庄司 知史	小川 綾子
	坂本 留美	クラリネット	河端 秀樹	山口 夏彦
第2 ヴァイオリン	花崎 淳生 片桐 恵里	ファゴット	笹崎 雅通	一二三麻衣子
	小原 康子 塩野入清美	トランペット	杉本 道応	海保 泉
	岡田 文子 原 徳子	ホルン	会田 省三	高橋 朋子
ヴィオラ	三輪 真樹 幡谷久仁子		飯島さゆり	藤原 貴裕
	鈴木友紀子 福田 道子	トロンボーン	井上 康一	尾山 碧
	神田 幸彦 山口 真		末次 孝規	
チェロ	田崎 瑞博 豊原さやか	チューバ	四條由紀子	
	斎藤 章一 小林奈那子	ティンパニー	畑中 暢行	
コントラバス	諸岡 典経 栗田 涼子	ハーブ	野溝 法子	

曲目解説

メンデルスゾーン 「キリエ 二短調 (1825)」

ゲーテの親友であった作曲家ツェルターに厳格な対位法を学んだフェリックス・メンデルスゾーンは1825年の春、父のバリ出張に同伴した時、巨匠ケルビーノを訪問し自作のピアノ四重奏曲を披露し絶賛されました。自身の価値を意識した16歳のフェリックスがケルビーノの二短調ミサ (1811) の主題に基づいて5声の対位法に仕上げたのが本曲です。ここには円熟期の大作オラトリオ“エリア”の冒頭フーガを予示する技法が随所に見られます。その神童ぶりを存分にお聴き下さい。

メンデルスゾーン 「讃歌《わが祈りを聞きたまえ》(1847)」

イギリスで“エリア”の初演に打ち込んでいた際、イギリス人の依頼で英語テキストにオルガン伴奏の曲として1844年に作られ、英・独の両テキストで出版されました。その後オーケストラ曲への編曲依頼を受け、1847年に完成させましたが、出版を見ずに世を去りました。メンデルスゾーンならではの心に染み入るメロディでビクトリア朝の最大の人気曲になりました。

ブラームス 「ドイツ・レクイエム (1868)」 作品 45

1853年9月、20歳のブラームスは紹介状を携えてシューマン家を訪問、自作を見せピアノ演奏を披露し、シューマン夫妻 (夫ローベルトは43歳の大成した作曲家、妻クララは当代一のピアニスト) に深い感銘を与えました。鋭い音楽批評家でもあったシューマンは雑誌『音楽新報』に「時代の最高の表現ができる新人が現れた。彼の名はヨハネス・ブラームス。」と絶賛文を掲載します。しかし、心の病を患っていたシューマンは翌年ライン川に身を投げ、2年半の苦闘のすえ1856年に世を去りました。このシューマンの死はブラームスが「レクイエム」に取り組む大きな動機になっています。

☆ 「ドイツ・レクイエム」と歌詞テキストの選定

レクイエムは伝統的にラテン語の典礼文に作曲されていました。しかし、ブラームスはルターのドイツ語聖書から自分が選んだ聖句を配置してテキストとしたため、「ドイツ (語による) レクイエム」と呼ばれることになりました。このスタイルは、古くはシュッツが17世紀に「音楽による葬送 SWV281」に採用し、晩年のシューマンも構想していました。ではブラームスはどのようにしてテキストを選定したのかを見てみましょう。全体は7楽章から成りますが、1,4,5,7楽章は比較的伝統的な聖句、2,3,6楽章はブラームスの思想が強く表れた選定となっています。1,7楽章は両枠となる“Selig sind 幸いなるかな”の伝統的聖句、4楽章はシュッツも作曲している“天国への思い”の詩篇、5楽章は“母の死”の関連聖句です。一方、2,3,6楽章は3つともフーガをとまなう (A, B) 2部形式で作られ、下の表に示したようなストーリーを持っています。

楽章	形式	ストーリー	聖書箇所	主題 (テーマ)
2	2部形式 (A,B)	A: 《叙述部》「人はみな死すもの」=朽ちる種だ / 「主が来られるまで」=忍耐せよ	第一ペテロ / ヤコブ5	《叙述》 葬送: 忍耐
		《移行部》「主の言葉は永遠」=朽ちない種の提示	第一ペテロ1	
		B: 《フーガ》「主に贖われ帰る」=栄光 (朽ちない種) の回復	イザヤ35	《フーガ》 希望
3	2部形式 (A,B)	A: 《叙述部》「主よわが終わりは」「わが生命は無」「何を待ち望む?」=自己存在論	詩篇39	《叙述》 我は何者か、どこへ行くのか?
		《移行部》「わたしはあなたを待ち望み」=希望		
		B: 《フーガ》「正しい者の魂は神の御手」=確信	知恵の書3	《フーガ》 信仰宣言
6	2部形式 (A,B)	A: 《叙述部》「永続の地を持たず」=自己存在論	ヘブライ13	《叙述》 最後の審判: 裏付け
		《叙述部》「我らを変えられる」=挑戦、「最後の審判」=裏付け、「死者は甦る」=希望	コリント15	
		《移行部》「地獄よ、お前の勝利はどこだ?」=勝利		
		B: 《フーガ》「主は、栄光、誉、力に相応しい方」=復活	ヨハネ黙示録4	

3つの楽章とも前半では「死と生」の思索を叙述し、移行部で「救い」が示され、フーガ部では「救い・復活」への確信、信仰宣言となっていると考えられます。19世紀にはヘーゲル、ニーチェ等が現れ宗教・信仰が哲学的に問い直された時代でしたが、この3つの楽章では音楽と合わせることによってブラームスの思索を読み取ることができます。

☆全体はどのように作られているのでしょうか

- 全体は①熟慮された各楽章形式、調性配置を有する対称構造を持ち、全体の統一感を生み出すため、②全楽章に現れるモットー、③ほぼ全楽章に埋められたコラールで構成されています。
- ①各楽章の形式、調性配置については、全7楽章が(1,2,3/4,5/6,7楽章)の3つのグループ分けられ、1,7楽章のへ長調F-durを外枠にして、4楽章を中心に配置し、2,3と6楽章が共通点を持った対称構造となっています。各楽章のところで述べますが、楽章内での明瞭な短・長調対比やロマン派の特徴である3度の転調が効果的に用いられています。
- ②全楽章には右譜例の“Selig sind幸いなるかな”の「モットー」が要所で出現します。「モットー」は例えば有名なベートーヴェンの運命の「ダダダダン」のように主題ほど旋律としてまとまった構造を持たない素材で、全体構造の礎となり、底流で鳴っていることによって統一感を生み出すものです。
- ③ほぼ全楽章に下の譜例の、バッハのカンタータBWV27“Wer weiss, wie nahe mir mein Ende!誰知らん、我が終わり近づくことを”で使用されているコラールが埋め込まれています。意味内容も3楽章の“Herr, lehre doch mich, dass ein Ende主よ、我が終わりを教えて下さい”に近いことが注目を惹きます。



☆構想から完成まで10数年を要しています

- シューマンの死が「レクイエム」作曲の動機となり、実母の死がその完成に向けて拍車をかけました。
 1856 (23歳) (シューマンの死) 葬送行進曲 (1854年作曲の二短調ピアノ協奏曲スケルツォ) をレクイエム2楽章としてコラール風行進曲に改作。
 1865 (32歳) (2月に母の死) 3楽章を春に、1,4楽章を夏に、6,7楽章を8月に作曲。
 1868 (35歳) 5楽章を加え全曲を完成。翌年、ライプツィヒで全曲を初演。

シューマンは「ミニョンのためのレクイエム (作品98b)」やラテン語の「レクイエム 変ニ長調 Des-dur (作品148)」を作曲していますが、「ドイツ・レクイエム」も構想していた記録が残されています。従ってシューマンの死が「レクイエム」作曲の動機となっただけでなく、ドイツ語による創作の意思も受け継いだものと考えられます。作曲に当たってブラームスは、シューマンのみならず、シュッツ、バッハ、ベートーヴェン、シューベルト等偉大な先達の音楽を深く研究し吸収したうえで、長い年月をかけてブラームス・トーンに創造的に変身させました。こうした創作態度は他のジャンルにも共通するもので、若い時から取り組んでいた交響曲でも、ベートーヴェンの後に相応しいものとして第1交響曲を世に問うたのは、「ドイツ・レクイエム」の成功で作曲家の地位を確立した10年後の1877年でした。

☆各楽章について

- I楽章 へ長調 (F-dur)、4/4拍子 「かなりゆっくりと、そして表情をつけて」 (A、B、A) 3部形式
 上述譜例のコラール旋律で「コラールプレリュード」風に展開する“天上と地上”の音楽対話。
 A部：無伴奏合唱が“Selig sind幸いなるかな”の「モットー」で“天上”の音楽を奏でる。
 B部：シューマン的な変ニ長調 (Des-dur) に転調し、“死の悲しみと再生の喜び”を対比的に描く。
 コーダ (結び)：天の声のような“getröstet慰められる”が「モットー」の下降音型で歌われる。

2楽章 変口短調 (b-moll)、3/4拍子 「ゆるやかに、行進曲風に」 (A、B) 2部形式

19世紀の時代精神が溢れる曲で、葬送行進曲 (短調) と長大フーガ (長調) の対比が鮮やか。

A部: ロマン派好みの変口短調 (b-moll)、フルオケでppとffがマーラーのように強烈に対比される。

B部 (フーガ): 移行部 “aber.....しかし”、に続き、同主調の “変口長調 (B-dur) となり、“ewige Freude永遠の喜び” に向け三重に繰り返して高揚する劇的なフーガは、ベートーヴェン「第九」を想起させる。

3楽章 ニ短調 (d-moll)、2/2拍子 「アンダンテ モデラート」 (A、B) 2部形式

アリオソ風対話曲、伝統調性 “ニ短調 (d-moll)” と力強いフーガ “ニ長調 (D-dur)” が明瞭に対比。

A部: バリトン独唱が合唱と掛け合いながら曲の方向性示し長いテキストを語っていく。

移行部: “主よ、私は何を待ち望みましょう?” では重低音部が消え、存在基盤の喪失を象徴表現。

B部 (フーガ): 移行部と打って変って強烈な “ニ音dの重低音” による保持音が現れ、歌詞に出てくる「神の御手」を確信させる。この重低音が初演の際物議を醸した。

4楽章 変ホ長調 (Es-dur)、3/4拍子 「適度に動きを持って」 (A、B、A) 3部形式

重厚なフーガが続いた後、シンメトリーの中心に置かれた器楽的な舞曲で、「主のすまい=天国」への黙想的思いを、穏やかな木管の色彩を伴って舞曲感豊かに奏でる。

5楽章 ト長調 (G-dur)、4/4拍子 「ゆるやかに」 (A、B、A) 3部形式

独唱ソプラノがオーケストラと対話する内省的アリア。「ソプラノ=母」を越えた普遍的な慰めとなり、4楽章の黙想的内容を強めている。フルート、オーボエ、クラリネット、弱音器バイオリンは繊細な光背となり、最後では管楽器と弦の和音が一体化して、天上の響きを醸し出す。

6楽章 ハ短調 (c-moll)、4/4拍子 「アンダンテ」 (A、B) 2部形式

「最後の審判」に当たるところで、全曲の完成に向けすべてを結集した、劇的で凝集された力作。

A部: 「我ら、永遠の都を持たず」が歩みの旋律と半終止を繰り返す和声で進行する。バリトン独唱が “神秘” を告げ、頂点となる “最後のラッパ” が響き「ヴィヴァーチェ」に突入。「死者は蘇り、我らは変えられる」と強烈なリズムとなり、「死は勝利にのみこまれた」が執拗に繰り返される。

移行部: 最後の歌詞 “Wo ist dein Sieg? (地獄よ) お前の勝利はどこだ” が引き伸ばされる。

B部 (フーガ): 一つは堅固、もう一つは抒情的という対照的なフーガ主題で構成。後者が魅力的に演奏指示 *espress.* で表情豊かに歌われ、“神の栄光と力を讃え” ホモフォニックに結ばれる。

7楽章 ヘ長調 F-dur、4/4拍子 「Feierlich 荘重に、厳粛な」 (A、B) 2部形式

主題 “Selig sind die Toten主に結ばれて死ぬ人は幸いである” を、ソプラノが主調で天上的に響かせ、次にバスが属調で歌い継ぎ、全パートで自由に彫琢していく。天上に誘うような響きを醸すオーケストラが相まって、テキスト内容と和声両面で1楽章と対称を形成して結ばれる。

☆先達へのオマージュ (献辞)

現在の7楽章が完成するまでに、段階的に初演が行われています。

1867年12月 ウイーンにて: ヨハン・ヘルベック指揮 1-3楽章

1868年 4月 ブレーメンにて: ブラームス自身の指揮 5楽章以外の全曲

1869年 2月 ライプツィヒにて: カール・ライネッケ指揮 全曲

1867年の初演は失敗に終わりました。ブラームスが重要としていた3楽章フーガの重低音保持音を担当者が指定以上に強く演奏し、他の声部をかき消してしまったためと言われています。1868年は万全を期してブラームス自身が指揮しました。「あとはシューマン夫人ただひとり、いてくれないと悲しいよ」と待っていたクララ・シューマンが、はるばるかけつけ開演に間に合い、驚きと喜びのブラームスにエスコートされ会場に入りました。演奏はただただ圧倒的で、聴衆はこのレクイエムが、人類に供された大名曲と肩を並べる作品だと、その場ではっきりとわかったのです。

シューマンの死が動機となり、「ドイツ語でのレクイエム」の意思を受け継いで長い年月をかけて創作に打ち込みましたが、この作品にはシューマンのみならず、自分が研究してきたシュッツ、バッハ、ベートーヴェン、シューベルト等、偉大な先達へのオマージュ (献辞) が込められていると思います。

(藤井良昭: 会員)

横浜合唱協会

横浜合唱協会はJ.S.バッハ合唱作品の本格的な演奏活動を目指して、1970年に発足したアマチュア合唱団です。以来、会員自らの企画の下、古典宗教音楽を中心とした演奏活動を行い現在に至っています。J.S.バッハを中心に据えつつ、パレストリーナ、モンテヴェルディ、シュッツ、ヘンデル等からメンデルスゾーン、ブラームス、ブルックナー等のロマン派、マルタン、ベルトなど近・現代の作曲家に至る作品を幅広く取り上げています。

指導陣は、東京混声合唱団の元正指揮者である八尋和美氏を常任指揮者とし、ピアノ伴奏者に谷口明子氏、松尾地恵子、木島千夏、小林彰英、佐野正一の諸氏をヴォイストレーナーに迎え、音楽・発声の両面から指導を受けています。これまで60回を数える定期演奏会では、小林道夫、若杉弘、黒岩英臣等の諸氏を客演指揮者として迎えました。1997年と2002年のドイツ演奏旅行では、バッハ縁りのライブツィヒ聖トーマス教会礼拝式での演奏、タールビュルゲル夏の音楽祭などドイツ各地での公演を通し、大きな足跡を残しました。バッハ没後250年節目の2000年は創立30周年にもあたり、現トーマスカントールの G.C.ピラー氏をはじめライブツィヒ関係者の協力を得て記念演奏会「BACH FEST 2000 TOKIO」を開催し、大きな反響を得ました。2004年には G.C.ピラー氏の指揮のもと「マタイ受難曲(初期稿)」を演奏し好評を博しました。2008年夏には第3回ドイツ演奏旅行を実現しライブツィヒ、シュトゥットガルトなどで演奏を行いました。

正 会 員

[ソプラノ]

小見山嘉子	長尾 里美	平鹿 諭子	飯島 純子	新谷 暁	須賀 由美	藤井 節子
木村 美保	魚本 充子	市川 浩子	山田 都	志村 知子	高田 文子	古宮真紀子
青柳 敦子	岡崎 希枝	広庭 恵美	森岡 美紀	河野 敦子	渡部 園美	中村さえ子
土田 紀子	恒吉 理美	長谷川由里子	荒井 直子	松尾 裕子	中川 里穂	北村千恵子
柏木梨重子	川島香菜子	北原 規子	前田 佳子	大塩 亜季		

[アルト]

堂崎 律子	大杉 純子	新井千鶴子	中野 理子	和田 京子	馬岡 洋子	西田 和子
岩附美知子	山本久美子	山田多佳子	藤井美智子	堀内 陽子	中山 典子	新井 光恵
水越 淳子	鈴木理絵子	那須比奈子	保田 康子	田島 京子	八田 啓子	山内 璃子
太田 明子	山崎 裕子					

[テノール]

藤井 良昭	堂崎 浩	馬岡 利吏	土井 賢一	松本恵太郎	古根 正治	清水 光洋
片岡 元彦	岡田 亮介	長谷 雅信	川越 信彰	和久井一男	山口 綾規	岡田 淳
Barbara Jucker						

[バス]

田川 正浩	新井 隆士	大石 康夫	飯島 龍哉	天ヶ瀬圭三	山田 直樹	小澤克之助
松田圭一郎	若狭 保弘	梅原 俊之	高橋 誠	平鹿 一久	市川 純也	安積 和彦
西脇 弥彦						

維 持 会 員

丹内紀久代	鹿島 和子	石橋由紀子	児玉 弓子	伊藤 邦子	気賀沢忠文	新居 康彦
竹村 重雄	万年 武	富澤 尊儀	清水 正子	梅津 実可	中山 元子	武田 サヨ
大竹 衣子	柴田 秀男	山岡 千秋	佐久間貴美	安広 百代	中西 牧子	入澤 三徳
藤井可奈子	中村小絵子	松下 孝	佐々木聡子	吉崎 桂江	友田 晃利	八尋 直美
鈴木 園子	三宅 雅子	柏 聡子	増村 照文	久保 祐子	村木誠一郎	山本 政之
勝山久仁子	柴田 洋子	西連寺利絵	入澤 洋子	鈴木 康司	山下 誉子	小野沢 誠
飯島 幸子	魚本 一司	平井 聡子	平井 透	茂木紀美子	石川 鮎子	笹井 平
柴田 英治	吉川由里子	陶山 悟嗣	三宅 健一	国分エリ子	小見山雄次	正嶋 博政
雀部 征宜	鳥山 純一	津守 滋	土井美智子	森岡 剛	白石 洋子	日沖 憲司
本多 志織	加藤 拓朗	松田 久美	谷口幸一郎			

横浜合唱協会ホームページ <http://www.ycs.gr.jp>